

一本柳遺跡群

HIGASHI DAI MON
東 大 門

岩村田遺跡群

SUGE TA
菅 田 IV

中金井遺跡群

NAKA KANA I
中 金 井 II

長野県佐久市岩村田 東大門、岩村田 菅田第4次、
小田井 中金井第2次発掘調査報告書

1990

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

総 例 言

- 1 本書は、長野県佐久埋蔵文化財調査センターの昭和63年度事業、一本柳遺跡群東大門遺跡、岩村田遺跡群菅田遺跡第4次、中金井遺跡群中金井第2次の発掘調査報告書の合本である。
- 2 調査委託者 東大門・中金井遺跡 佐久市土木課
菅田遺跡 浅麓水道企業団
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 調査所在地 東大門遺跡 (I IH) 佐久市大字岩村田1931・1965・2056・2087他
菅田遺跡 (I I SIV) 佐久市大字岩村田字今宿542-1
中金井遺跡 (ONK II) 佐久市大字小田井1164他
- 5 本書の編集は翠川が行い、原稿執筆は、東大門遺跡第II章第1節・第2節2)を白倉盛男が担当し、他はすべて翠川が行った。
- 6 本書及び東大門・菅田・中金井遺跡に関するすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、岩村田・小田井各地区地元の方々には発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

青木 一男、市川 隆之、宇賀神誠司、白田 武正、大竹 憲昭、岡村 秀雄、河西 克造、
興水 太伸、小平 恵一、小林 秀行、近藤 尚義、笹沢 浩、島田 恵子、新海 節生、
堤 隆、寺内 隆夫、寺島 俊郎、花岡 弘、原 明芳、福島 邦男、三上 徹也、
宮下 健司、百瀬 忠幸、森泉かよ子、由井 茂也、綿田 弘実

(敬称略、五十音順)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集

一本柳遺跡群

HIGASHI

東

DAI

大

MON

門

長野県佐久市岩村田東大門遺跡発掘調査報告書

1990

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

1 本書は、佐久市土木課による市道2-287号線の改良工事に伴う、一本柳遺跡群東大門遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査委託者 佐久市土木課

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査対象地番および面積 一本柳遺跡群東大門遺跡(略号I I H)
佐久市大字岩村田1931・1965・2056・2087・3142他

800㎡

5 調査期間

発掘調査 平成元年3月6日～3月23日

整理調査 平成元年3月24日～平成2年3月31日

6 調査団の構成

(事務局) 佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳

庶務係長 畠山 俊彦

庶務係 菊地 直美(平成元年2月就任)

飯沢 恵子(平成元年6月就任)

調査係主査 高村 博文

調査係 三石 宗一、小山 岳夫、小林 真寿、翠川 泰弘、助川 朋広、
藤原 浩江(平成元年3月退任)、神部 妙子(臨時職員)

(調査団)

団 長 白倉 盛男(佐久考古学会副会長)

調査指導者 林 幸彦(佐久市教育委員会)

須藤 隆司(佐久市教育委員会)

羽毛田卓也(佐久市教育委員会)

竹原 学(佐久市教育委員会)

調査担当者 翠川 泰弘

調査主任 助川 朋広

調査員 大井今朝太(佐久考古学会員)

- 調査補助員 小林 幸子、木島 美子（佐久考古学会員）
 発掘協力者 高地 正雄（佐久考古学会員）、成沢 富子（佐久考古学会員）、
 堀籠みさと（佐久考古学会員）、森角せきよ
 整理協力者 木内 明美、花岡美津子
 遺物写真 畠山 俊彦

7 本書の編集は翠川が行い、執筆は第II章第1節を白倉盛男が担当し、他の章については翠川が行った。また、遺構写真は翠川・助川が撮影した。

8 本書に関するすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、一本柳区長清水昭雄氏をはじめ、河内耕一氏、茂木孝氏等地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

凡 例

1 遺構の略称 溝状遺構⇒M

2 標高は縮尺尺度の上に明記した。

3 挿 図

1) 縮 尺 土器⇒1/4、石器⇒4/5・1/3・1/6、写真図版中の遺物の縮尺も左記に準換するが、第12図1は1/3である。

2) 遺物実測図に用いたスクリントーンは下記内容の表現である。

土器実測図

赤色塗彩 

須恵器断面 

石器実測図

炭化物 

目 次

例 言

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至る動機	1
第 2 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の立地と環境	3
第 1 節 自然環境	3
第 2 節 歴史的環境	5
第 III 章 基本層序及び概要	8
第 1 節 基本層序	8
第 2 節 検出遺構・遺物の概要	8
第 IV 章 遺構と遺物	12
第 1 節 溝状遺構	12
1) 第 1 号溝状遺構	12
2) 第 2 号溝状遺構	15
第 2 節 遺構外出土遺物	20
第 V 章 調査のまとめ	21
引用参考文献	

付 表 目 次

第 1 表 周辺遺跡一覧表	6
第 2 表 第 1 号溝状遺構内出土土器観察表	14
第 3 表 第 2 号溝状遺構内出土土器観察表	17

挿 図 目 次

第1図	東大門遺跡の位置	1
第2図	東大門遺跡の位置及び周辺遺跡分布図	4
第3図	四隣譚藪(巻之二)附園鹿大井郷之図	7
第4図	基本層序模式図	8
第5図	東大門遺跡発掘調査地区及び遺構全体図	9
第6図	東大門遺跡発掘区設定図	11
第7図	第1号溝状遺構実測図	12
第8図	第1号溝状遺構内出土土器実測図	13
第9図	第2号溝状遺構内出土土器実測図	15
第10図	第2号溝状遺構実測図・遺物分布図	17
第11図	第2号溝状遺構内出土土器実測図	19
第12図	遺構外出土土器実測図	20

写真図版目次

図版 一	1 東大門遺跡遠景	図版 三	1 石器出土状況
	2 A地区完掘状況		2 第1号溝状遺構出土土器
	3 B地区表土削平作業		3 第1号溝状遺構出土土器
	4 B地区完掘状況		4 第2号溝状遺構出土土器
			5 第2号溝状遺構出土土器
図版 二	1 第1号溝状遺構	図版 四	1 第2号溝状遺構出土土器
	2 第2号溝状遺構		2 第2号溝状遺構出土土器
	3 第1号溝状遺構セクション		3 第2号溝状遺構出土土器
	4 第2号溝状遺構セクション		4 調査区外出土石器
			5 調査スナップ

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

一本柳遺跡群東大門遺跡は佐久市大字岩村田に所在し、湯川右岸の台地上に立地する。この台地上には群集墳・弥生～平安時代の遺跡が多数存在し、佐久平のなかでも有数な遺跡地帯である。本遺跡群内では過去 3 回の調査が実施されており、東一本柳遺跡 (S43)・北一本柳遺跡 (S47) は弥生時代～中世に至る多数の遺構・遺物が検出された遺跡として、また、東一本柳古墳 (S46) においては金銅製の馬具・金環・勾玉等の貴重な資料を出土した古墳として知られている。さらに、本遺跡の周辺には弥生時代～古墳時代の大遺跡である北西ノ久保・上の城・西八日町遺跡が存在する。以上のことから本調査地区も、大遺跡群の構造を把握する上で重要な位置を占めていることが予想される。

今回、佐久市土木課により市道 2—287 号線の改良工事が本遺跡内で計画されたため、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となった。そこで佐久市土木課・佐久市教育委員会より委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行う運びとなった。



第 1 図 東大門遺跡の位置 (1 : 50,000 国土地理院地形図による)

第2節 調査日誌

平成元年3月6日(月)

機材搬入・整備・テントの設営を行い、現場調査の準備をする。

3月8日(水)・3月9日(木)

バックフォアにより、A地区の表土削平作業を開始する。第1号溝状遺構が検出される。プラン確認後、順次遺構の掘り下げ・実測・写真撮影作業を行っていく。完掘写真撮影後、A地区の埋め戻しを重機にて行う。

午後よりB地区の表土削平作業に着手する。

3月10日(金)・3月11日(土)

バックフォアによる表土削平、ダンプによる表土運搬作業を行う。

3月13日(月)

B地区のプラン確認作業を行う。第2号溝状遺構が検出される。B地区南端より、黒曜石製のスクレイパーが出土する。

3月14日(火)～3月16日(木)

第2号溝状遺構の掘り下げ作業に着手する。同址北端にサブトレンチを入れ、重複遺構の有無を確認する。セクション図・遺物分布図を作成し、写真撮影を行う。

3月20日(月)～3月22日(水)

第2号溝状遺構の完掘図、遺構全体図を作成する。B地区の全体清掃・全体写真撮影を行う。終了後、調査対象区の測量作業に着手し、併行して重機による埋め戻しを行う。

3月23日(木)

バックフォア・ダンプによるB地区の埋め戻し、排土置き場の整地作業を行う。テント・機材を撤収し、すべての現場作業を終了する。

3月24日(金)～平成2年3月31日(土)

室内において、報告書作成作業を行い、すべての調査を終了する。

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境

千曲川最上流部の標高700m内外の流域にあたる佐久平は、行政区分では大部分佐久市に属し、気候冷涼な高原盆地として一括して見られている。南方佐久山地の秩父多摩国立公園に属する甲武信ヶ岳から源を発する千曲川は佐久山地と西南側の南八ヶ岳方面からの小支流を合わせて北流して、佐久町付近で水量と川幅を増し、流域平地を広めて、白田町付近に至って佐久平と称せられ平坦地となり、佐久市の中心部を北に貫流して小諸市に流出している。この千曲川の流域に広がっている東西幅約6km、長さ約15kmの南北に長い変形の標高660~740m地域が佐久平である。この佐久平は地形地質の成因的には二大別され、佐久市の中心部を東西に流路を持つ滑津川を境として著しい差異が認められる。この境界がかつては旧南北佐久郡境にもなっていたが現在は三町一村の郡境を越えた合併による佐久市の新しい誕生によって消失した。しかし自然的条件は依然として明らかに残されており、南北の差は大きいものがある。滑津川以南の佐久平は千曲川流域沖積層地帯で標高680m内外の平坦地で千曲川とその支流の用水を活用した水田地帯である。滑津川以北は千曲川右岸にあたり、北部界隈にそびえている浅間火山の堆積物分布地帯で標高700m内外と一段高台をなしている。浅間火山はわが国の火山としては最も新しい三重式成層火山で、現在も活動を続けている典型的な火山で佐久平北半部はその噴出物に被われている。その噴出物堆積層の南縁部は旧岩村田町・中込原にまで及んでいる。東大門遺跡はその旧岩村田町の西南端湯川右岸沿に立地している。

東一本柳付近の地層の堆積状況の最下部層は浅間火山第一次黒斑火山の最活動期の山体を破壊した水蒸気爆発による塚原泥流が山麓南面一帯に流下して、平坦部千曲川沿岸で圧力を減じ溶岩熱泥流の内容物を散在堆積したものである。この塚原泥流は塚原部落・三岡駅付近まで流れ山残丘状に大小100ヶを越す多数の小丘を作っている。又黒斑溶岩を主とした黒褐色の岩塊と泥流堆積物で、基盤整備以前には現在より多数あり一部は古墳や墓地に利用されてもいた。旧岩村田町内部まで一部分分布していた例証としては黒岩城、萬石遺跡調査現場でも確認されている。

この塚原泥流の堆積上面へは黒斑火山のその後の長期に亘る火山活動の火山弾火山灰砂礫が空中堆積して厚く不規則凹凸の地表面を平準化している。この活動は長期に亘って続けられ浅間火山南麓一体軽井沢・小諸地域・最南縁は中込原まで厚い堆積層を作っている。佐久市北部の火山堆積物は全てこれに属し第一軽石流(P₁)第二軽石流(P₂)の二期に大別され小諸懐古園・鼻

顔稲荷神社付近でその厚層を見ることが出来る。この軽石流の堆積時期は内部に含まれている自然木炭によるC¹⁴の測定によって10,650±250YBP洪積期終期とされている。この堆積層は主として火山灰砂礫浮石によって構成されているため水の浸食に弱く、山麓緩傾斜地では水流洪水に浸食され、御代田・三岡付近では火山地域特有の“田切り地形”が見事に発達した長土呂・小田井にまで及んでいる。田切り地形の底を流れる小流は弥生期の水田開発に活用されたものもあるようである。

東大門遺跡付近は塚原泥流最末端部分にあたり、その地表面の低所には地下水の湧出、雨水湧水の貯溜等による湿地沼沢地も形成され、そこに初期水稲栽培が行われたものであろうか、現在も若宮社周辺には沼沢状湿地が分布して、旧岩村田町辺の古くから開拓された水田地帯であるといわれている。

(白倉 盛男)

引用参考文献

八木 真助 『浅間山』 昭和11 佐久教育会



第2図 東大門遺跡の位置及び周辺遺跡分布図 (1:25,000国土地理院地形図による)

第2節 歴史的環境

1) 考古学的環境

一本柳遺跡群東大門遺跡は、佐久平のなかでも多数な遺跡地帯である湯川右岸の台地上に立地し、一本柳遺跡群の中央東部に位置している。

遺跡群内では、過去3回（昭和43・46・47年）の発掘調査が実施されている。昭和43年、当時東京教育大学教授であった八幡一郎氏等により東一本柳遺跡（3）が調査され、古墳時代後期の住居址5棟及び該期の遺物が多数検出された。昭和46年には東一本柳古墳（5）の調査が行われ、金銅製の馬具・金環・勾玉等貴重な資料の出土が見られた。さらに昭和47年には、北一本柳遺跡（4）の調査が実施された。この調査では弥生時代後期の住居址7棟・古墳時代～平安時代の住居址10棟、その他平安時代～中世の土坑及び該期の遺物が多量に検出された。以上、過去3回にわたるこれ等の発掘調査により、遺跡群内の東部を中心とする様相がしだいに明確化されてきている。

一方、遺跡群内よりさらに遠方に眼を転じ、より巨視的な視野から東大門遺跡を取り巻く周辺の遺跡概況を観てみると第2図・第1表の如くなる。

縄文時代の遺跡は非常に少なく、本遺跡群の周辺には鳴瀬遺跡群（19）・上の城遺跡群（44）・円正防遺跡群（7）の3遺跡が存在するのみであり、且つこれ等の遺跡は縄文時代を主体とする大規模な集落遺跡である可能性が低い。また旧石器時代の遺跡においては、皆無である。しかし、弥生時代以降になると遺跡数は急激に増加し、大規模な集落遺跡が形成される様になる。本遺跡が立地する湯川右岸の台地上には、上の城遺跡（45）・上の城丹過遺跡（46）・西八日町遺跡（47）等に代表される様に、百棟を越える住居址が検出された大規模な集落遺跡や、北西久保古墳群（17）・上鳴瀬古墳群（18）等に代表される古墳群が密集した状態で分布し、佐久平随一とも言える一大遺跡群が展開される。また、湯川を挟んで対峙する湯川左岸台地上においても、弥生時代以降になってから遺跡数の増加が観られる。但し、湯川左岸の台地上は、右岸に比べ発掘調査事例が少ないため詳細については不明であり、今後の調査に期待される部分が多い。

引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1972 『佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告』
佐久市教育委員会 1972 『佐久市岩村田一本柳遺跡発掘調査概報』

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	住所No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
					彌	古	中	平	小	
1		東大門遺跡	岩村田字東大門	古墳	○	○	○	○	○	
2	105	一本柳遺跡群	岩村田字東一本柳、下根字寺、東大門北、西一本柳、北一本柳、中一本柳、下塚田、西一本柳、宮木上、下塚田	古墳	○	○	○	○	○	照和72
3	105-1	東一本柳遺跡	岩村田字東一本柳	古墳	○					昭和43年度発掘調査
4	105-2	北一本柳遺跡	岩村田字北一本柳	古墳					○	昭和47年度発掘調査、文庫14
5	115	第一一本柳遺跡	岩村田字東一本柳228-7	古墳						昭和46年度発掘調査、文庫239
6	41	坂原久保遺跡 坂原・眞津崎、下六倉、下久保田向、上久保田向、保土字赤久保	古墳		○	○	○	○		照No79
7	39	岡北野遺跡群	岩村田字岡北野、田中、黒石、池水田	古墳	○	○	○	○		
8	39-1	池水田遺跡	岩村田字池水田	古墳	○	○	○	○		昭和43年度発掘調査、文庫53
9	102	松の木遺跡	岩村田字松の木	古墳	○	○	○	○		
10	101	上塚田	岩村田字上塚田	古墳	○	○	○	○		
11	117	高字宮上古墳	岩村田字西塚原1736-9	古墳						照No181
12	114	岡波山古墳	岩村田字東本1347	古墳						照No179
13	103	宮の西遺跡	岩村田字宮の西	古墳	○	○	○	○		昭和58年度29年度地点発掘調査、文庫61
14	113	山北遺跡	岩村田字山北1881-1	古墳	○					照No80、国史
15	104	宮の北遺跡	岩村田字宮の北	古墳	○	○	○	○		
16	98	北宮ノ久保遺跡	岩村田字北宮ノ久保	古墳	○	○	○	○		昭和44・45年度発掘調査、文庫6 昭和54年度追加調査、文庫34 昭和 57・60年度発掘調査、文庫54、照 No182
17	116	北宮西古墳群	岩村田字北宮西	古墳						昭和47年度発掘調査、文庫54
18	111	上塚田古墳群	坂々字上塚田888-1、913-1、921-1	古墳						照No184小塚田遺跡、国史
19	96	鴨澤遺跡群	坂々字鴨澤、東塚上、上塚澤、五塚田、東塚	古墳	○	○	○	○		照No183
20	106	松ヶ井東遺跡群	松ヶ井東(東塚上、鴨澤)	古墳						○
21	99	中塚の久保遺跡群	岩村田字中塚の久保、東塚の久保、南西の久保	古墳	○	○	○	○		
22	130	中塚遺跡群	岩村田字中塚	古墳	○	○	○	○		
23	136	南塚分遺跡群	坂々字南塚分、北塚分	古墳	○	○	○	○		
24	137	寺畑遺跡	坂々字寺畑、山下、西塚分、山の峰、十二万大山、山上、塚原、北塚、松久保字下塚、前塚、稲巻遺跡	古墳	○	○	○	○		照No163
25	246	宮上北古墳	松久保字宮上北	古墳						照No161
27	247	西塚分遺跡	中込字西塚分	古墳	○	○	○	○		
28	123	東久保原遺跡群	松久保原東遺跡	古墳	○	○	○	○		
29	248	東塚遺跡群	松久保字東塚、山上、前塚、中込字西塚分、東塚、東大塚南、平活遺跡	古墳	○	○	○	○		
30	259	新塚山古墳	松久保字新塚山	古墳	○					照No166
31	260	金井墓塚古墳	松久保字墓塚	古墳	○					照No168
32	52	岩村田遺跡群	岩村田字六所後、六所、行人塚、松の木、新町、中塚、木戸倉家、外高塚、菅田、坂野、山崎、坂下、北沼鬼字塚	古墳	○	○	○	○		照No74
33	51-1	三塚群	岩村田字三塚	古墳	○	○	○	○		昭和54年度東久保地区に伴い一般調査 文庫41
34	51-2	石塚群	岩村田字石塚	古墳	○	○	○	○		
35	51-3	黒竹群	岩村田字黒竹	古墳	○	○	○	○		昭和55年度黒竹場分発掘調査、文庫 42
36	48	藤倉遺跡	下平尾字藤倉、高内	古墳	○	○	○	○		
37	47	西大久保遺跡群	下平尾字西大久保、下平尾字六間、上、中、下大久保	古墳	○	○	○	○		照No48、分有多い
38	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	古墳	○	○	○	○		昭和54年度昭和河川加尾川調査、文 庫41
39	49	上小平遺跡	岩村田字上小平	古墳				○		照No47
40	48	池田遺跡	宮原字池田	古墳				○		照No46
41	55	坂本古墳	宮原字坂本1520	古墳				○		照No45
42	118	下松崎古遺跡	岩村田字下松崎	古墳						昭和54年度発掘調査、文庫57
43	542	坂々・松崎	岩村田字東八日町、南上塚	古墳						国史、文庫69
44	117	上の松遺跡群	岩村田字舟越、東御免平、上の松、中八日町、東八日町、上の松、西八日町	古墳	○	○	○	○		照No73
45	117-1	上の松遺跡	岩村田字上の松	古墳	○	○	○	○		昭和43年度発掘調査、文庫17
46	117-2	上の松古墳遺跡	岩村田字舟越	古墳					○	昭和54年度発掘調査、文庫36
47	117-3	西八日町遺跡	岩村田字西八日町	古墳	○	○	○	○		昭和48年度発掘調査、文庫57
48	134	宮原東遺跡	岩村田字宮原東	古墳	○	○	○	○		
49	119	東原大遺跡群	東原字東原、西大久保、北塚群、南加瀬	古墳						照No43
50	126	坂原古墳	坂原字坂原1377、1367	古墳	○					昭和47年度発掘調査、照No44
51	129	地塚古遺跡群	新子田字地塚、西塚、北野宮久保、野宮久保	古墳						照No32
52	128-1	坂原宮一次	新子田字野宮久保	古墳						昭和54年度発掘調査、文庫37
53	128-3	坂原宮二次	新子田字野宮久保	古墳						昭和54年度発掘調査、文庫38
54	122	野宮保遺跡群	松久保字野宮保	古墳	○	○	○	○		照No158
55	122-1	野宮保遺跡	松久保字野宮保	古墳	○					昭和46年度発掘調査、文庫51
56	125	野宮北古墳	松久保字野宮北164-1	古墳						
57	121	東内遺跡群	新子田字東内	古墳				○		
58	129	高崎町遺跡群	新子田字高崎町、福原万、松ヶ地、松ヶ地	古墳						照No33下塚田遺跡
59	251	小池遺跡	新子田字小池	古墳	○	○	○	○		

2) 「四隣譚藪」から見た東大門遺跡の歴史^{註1}

最近岩村田近傍での考古学遺跡発掘が各所で行われ、その都度その歴史・由緒・地名など不詳のものが多く、調べるよすがに困却していたが、鶏山吉沢好謙先生(1710~1777)著「四隣譚藪」を見出し一見したところ、江戸中期信濃文化貢献者、郷土研究の先達、俳人寺子屋師匠学者で多くの著書出版されておられる先生が力を注いでまとめられた、佐久郡大井郷(岩村田付近)の古今東西の盛衰・地名の由来の詳細が記載されていた。これは、先生27歳の著書で、その時代を中心とした現地調査ならびに文献の稀少であった時代に古書をあまねく探し求め集大成された研究の成果が手際よくまとめられたものであり種々の面で大いに参考になった。同書は現在絶版もので入手困難でもあるので、今回本文原稿執筆に直接関連した部分を参考文献の一部として追記する。

この「四隣譚藪」は『信濃史料叢書』(大正3)・『歴史図書社』(昭和44)・『信濃史料刊行会』(昭和49)・『浅間郷土誌研究会』(昭和52)に記載されている。

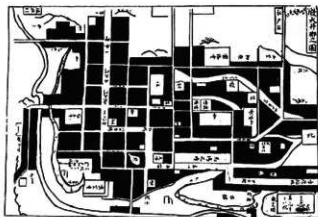
一むかし大井郷は、民家六千軒、交易四達し、賑ひ國府にまされり、八日町通石橋といふ所、城外市店の中央なりとぞ。文明甲辰の兵火にかかりて、神社佛閣一塵の煙と成て終におこらず、市店の地を繪て據岩村田といへり。

往昔大井城外の廣狹をせ按、南北凡四十一町許、東西凡三十四五町、或は四十三五町許、交易利達の地頗なり。

(白倉 盛男)

引用参考文献

- 吉沢 鶏山 『四隣譚藪』 昭和52 浅間郷土誌研究会



第3図・四隣譚藪(卷之二) 附図大井郷之図

註1 本文章は白倉盛男が第1節

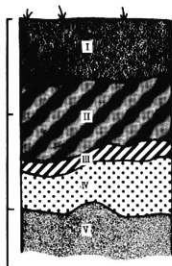
自然環境の追記として執筆した原稿であるが、新たに翠川がタイトルを付け、第2節2)として掲載した。

2 第1節自然環境の文章のことである。

第III章 基本層序及び概要

第1節 基本層序

一本柳遺跡群東大門遺跡は、一本柳遺跡群の中央東部に位置し、標高700m内外を測る湯川右岸の台地上に立地する。本調査地区の現況地形は南から北西方面へ緩く傾斜し、標高はBトレンチ南端部で698.94m、Aトレンチ西端部で697.78m、比高差は1.16mを測る。



第4図 基本層序模式図

発掘区における基本層序の観察は、A地区西端部とB地区南端部で行い、良好な堆積状態を示す後者を抽出した(第4図)。本遺跡の基本層序は以下の5層に分けられる。

- 第I層 10Y R4/4褐色 きめ細かい砂質土層。
- 第II層 10Y R2/3黒褐色 きめ細かい砂質土層。
- 第III層 10Y R6/8明黄褐色 ローム主体土層。
- 第IV層 10Y R8/8黄橙色 砂質ローム層。
- 第V層 10Y R8/4浅黄橙色 砂質ローム層。

第I・II層は耕作土であり、第II層は有機質に富む。第III層は耕作により攪拌された第II層・IV層の

混在層であり、B地区の南部より中央部にかけてのみ認められる土層である。第IV・V層は火山層で、遺構は第IV層上面において確認された。

第2節 検出遺構・遺物の概要

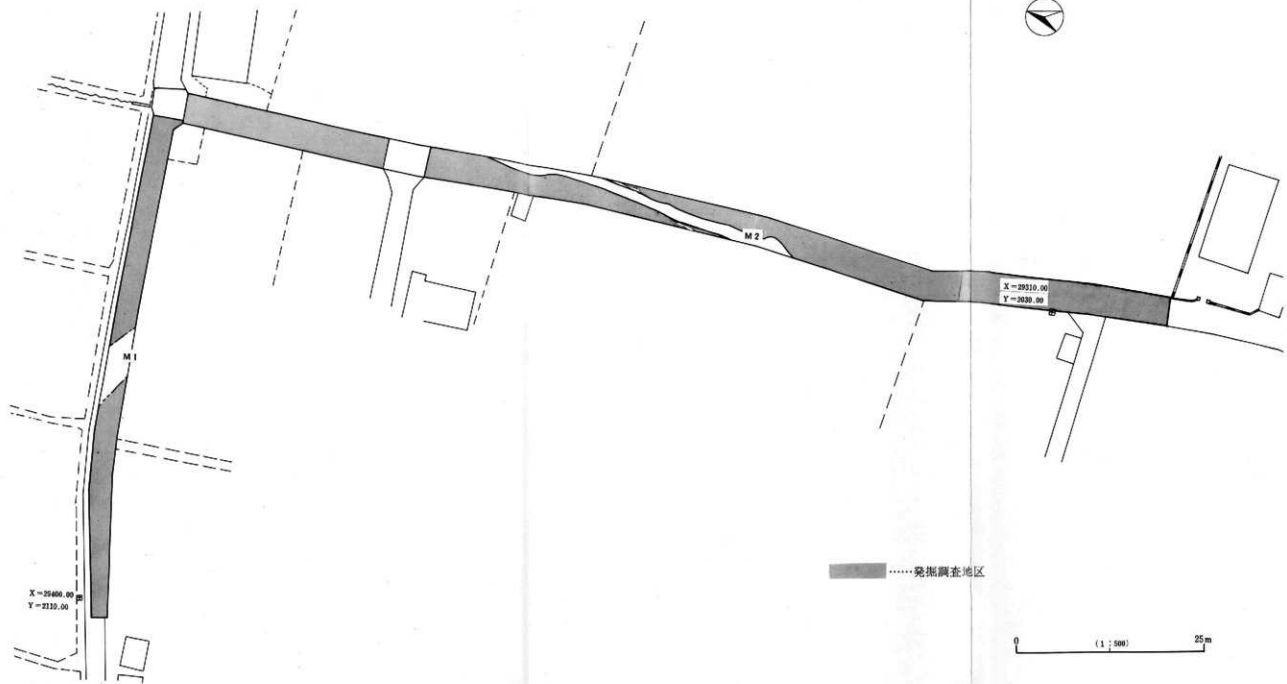
遺構

溝状遺構 2条 弥生時代後期(M1)
時期不明(M2)

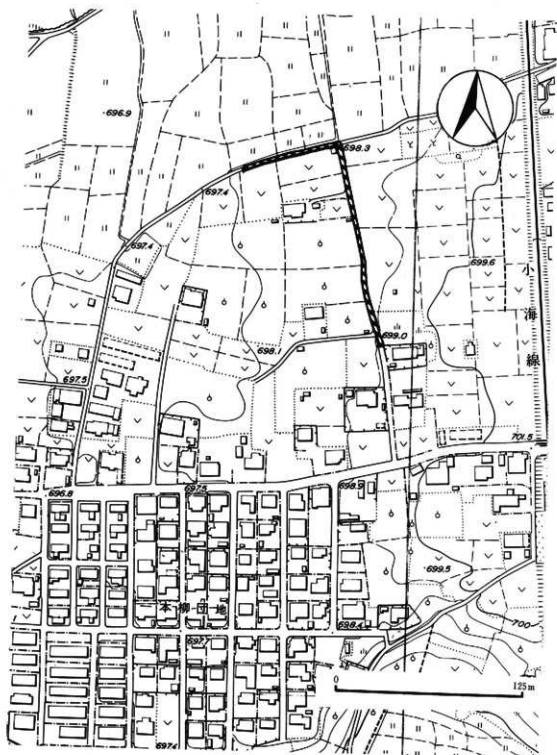
須恵器 長頸壺(?)・坏
灰釉陶器 坏
土師質土器 内耳
青磁 坏(?)

遺物

土器 弥生土器 壺・甕・高坏(?)・鉢
土師器 坏
石器 スクレイパー・打製石斧・磨石



第5図 東大門遺跡発掘調査地及び遺構全体図



第6図 東大門遺跡発掘区設定図（1：2,500佐久市基本図14・15による）

第IV章 遺構と遺物

第1節 溝状遺構

1) 第1号溝状遺構

遺構 (第7図、図版二)

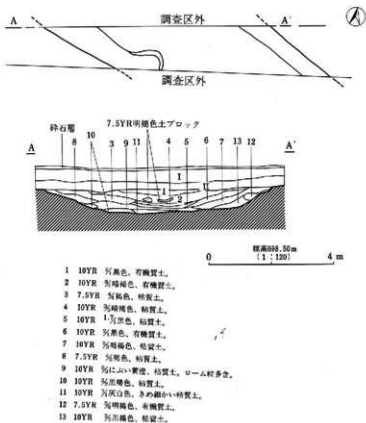
本址はA地区中央やや西寄りに位置し、全体層序第IV層上において検出された。道路拡幅工事に伴う調査であるため調査区が限定され、遺構の極く一部が検出されたに過ぎず、平面形態・規模については溝幅が508cmを計測する以外は不明である。

他遺構との重複関係は無い。

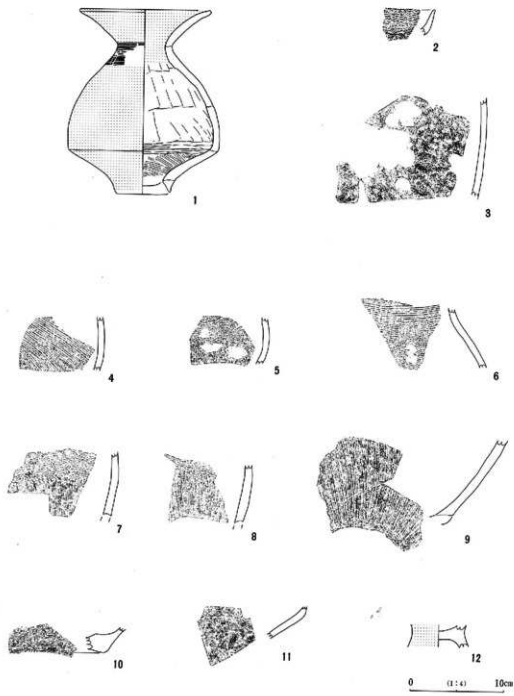
覆土は13層に分割されたが、各層共に有機質あるいは粘性に富んで粒子が細かく、性質に共通性が窺える。

底面は平坦面を形成し、壁の立ち上がりは緩やかであり、鍋底状の断面形態を呈する。

遺物 (第8図、図版三)



第7図 第1号溝状遺構実測図



第8图 第1号溝状遺構内出土土器実測図

本址からは弥生時代後期の土器のみが出土している。土器は本址中央南寄りの調査区壁の周辺に分布が集中し、底面直上に薄く堆積する第4・5層中において土圧により潰れた様に折り重なった状態で出土した。尚、南側の調査区外には多量の土器が残存しているものと思われる。

弥生土器の器種には壺(8-1~3)、甕(8-4~10)、高坏?(8-11・12)が観られる。1は屈折底を有する小型の壺であり、部位によりプローションの変換が著しい。土器の破損は粘土帯からの剥落によるものが殆どであり、粘土帯の幅(口唇部を除く)は5cm内外を計測する。このことから、本土器を製作する際には6回(底部で1回、底部から外縁部で1回、外縁部から頸部で3回、頸部から口縁部で1回)の時間的な断絶があったことを推し測ることができ、また内面の調整状態も考慮すると、外縁部と胴上半部との断絶時間が最も長かったことが想定し得る。器厚は7mm内外と厚く、全体的にやや拙劣さを感じさせる土器である。2は屈折する口縁部の破片であり、櫛描波状文が施文される。3は大型壺の胴部破片で、内外面共に器表面の剥落が著しい。器厚約7mmを測る薄手のつくりを呈する。4は櫛描羽状沈線文の描かれた甕の胴部破片である。胎土は緻密で焼成も良好である。5は胴下半部の破片であり、10本を一組とする乱れた櫛描波状文を施文する。6~10は同一固体片と思われる。8本を一組とする櫛描簾状文・波状文が施文され、丁寧なミガキが施されている。11は高坏の坏部破片と思われる。内外面には黒褐色を呈する染み状の付着物が看取され、漆が塗られていたことを推察させる。今回図示し得なかったものの中にも同種のものが1例観られる。12は高坏脚部の破片と思われる。

本址出土の土器は、層厚の薄い限定された層位から出土しており風化状態があまり進展していないことから一括性が高いことが窺えたとともに、壺形土器の中に屈折底を有するもの(8-1)が存在するため、所産期を漠然と弥生時代後期後半として捉えることができる。一方、本址の覆土層には共通性が看取され、各層間の堆積には際立った断絶を見出すことができない。

以上のことから、本址は弥生時代後期後半の所産と考えられる。

註1 小山岳夫の教示による。

第2表 第1号溝状遺構内出土土器観察表

検出 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
8-1	壺	(13.6) (19.5) (5.1)	小さな底部より強く外反して外縁部に圍り、球形の影をもちながら細い頸部に移行し、強く外反した口縁部を形成する。最大径を外縁部(15.8cm)に待つ。	内) 口縁部から頸部赤色塗彩。横位のミガキ。頸部から胴上半部斜位のヘラナダ。胴下半部傾位のヘラナダ。 外) 頸部を除き赤色塗彩が施される。口唇部及び胴上半部横位のミガキ。口縁部及び胴下半部縦位のミガキ。 文) 頸部に8本一組の櫛描簾状文を施す。	回転実測 口縁部片残存 5層胎土 灰白色の粘土を使用し、白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好 色調 赤色塗彩面) 10R% (赤色) 他) 10Y R% (灰白色)
8-12	高坏	— —		脚内) 櫛描底が著しく、凹凸に富む。 外) 赤色塗彩、縦位のミガキ。	完全実測 5層胎土 白色砂粒・赤褐色粒子を多量に含む。 焼成 良好 色調 赤色塗彩面) 10R% (赤色) 脚内面) 5Y R% (明赤褐色) 断面) 5Y R% (灰白色)

2) 第2号溝状遺構

遺構(第10図、図版二)

本址はB地区中央部をほぼ南北に縦走する溝状遺構である。基本層序第IV層上において検出され、他遺構との重複関係は無い。前述の如く、調査区が限定されてしまったため全容が把握できない。検出長は約29.5mを計測する。

南端部及び北端部では形態に変化が観られるが、溝幅60cm内外を保ちながら直線的に縦走することを基調とする。

確認面からの深さは最深部で52cm、最浅部で26cmを測り、底面のレベルは北方の低地へ向ってレベルを低下させている。断面形は逆梯形状を呈する。

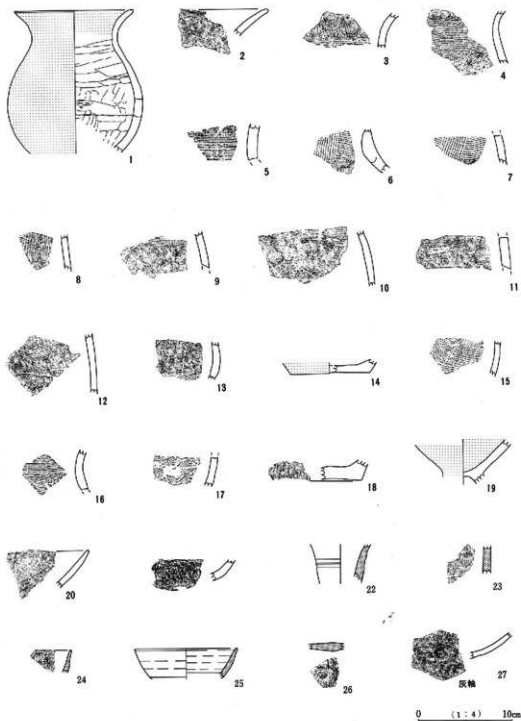
覆土は4層の砂質土層からなり、第1・2層は黒褐色、第3層は暗褐色、第4層は褐色を呈し、水の流れた痕跡が看取される。

遺物の出土状況(第10図)

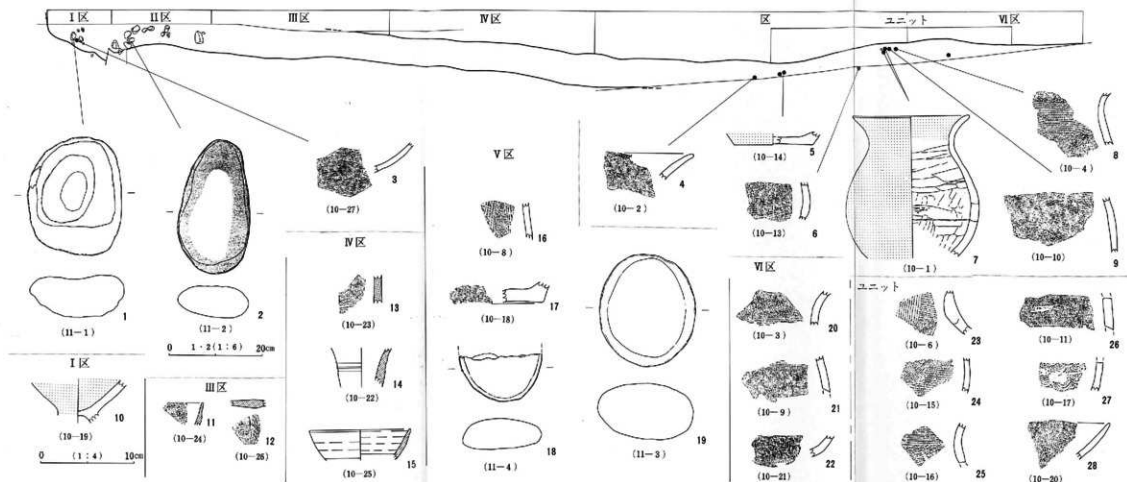
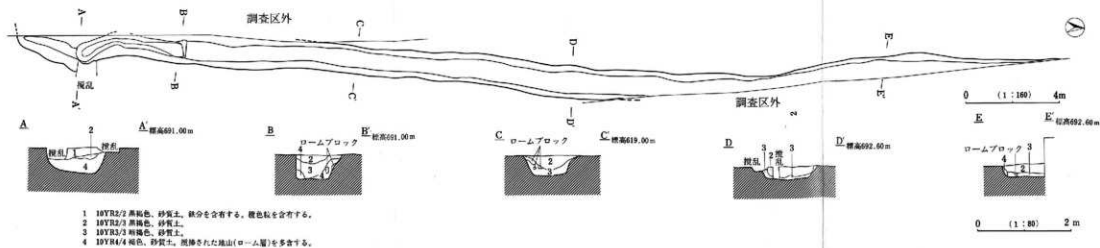
遺物の取り上げは、本址の形態を考慮しながら便宜的に全体を6地区に分割し、さらにV・VI区の中でも際立った遺物の出土量が認められる地区をユニット区画として取り上げると共に、礎石器及び大型土器破片を中心にドット処理を行った。その結果、次のような傾向が認められた。

第3表 第2号溝状遺構内出土土器観察表

検出 番号	器種	注 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
9-1	壺	(12.6) (15.1) —	口縁部赤色塗彩、横位のミガキ。最大径(14.3cm)は胴部中位やや下方に位置する。	内) 口縁部赤色塗彩、横位のミガキ。胴上半部縦いび位ナテ調整。胴下半部縦位のナテ調整。赤色塗彩。口縁部から胴上半部縦位のミガキ。 外)	完全実測、II区 胎土 白色砂粒を多量に含む。 焼成 良好 色調 赤色塗彩面) 10R5% (暗赤色) 他) 10YR5% (淡黄棕色)
9-14	壺	— (1.2) (8.3)		外) 赤色塗彩、縦位のミガキ。底面は直線的なミガキ。	破片実測、底部片残存 No28 胎土 白色・赤褐色の砂粒を多量に含む。 焼成 良好 色調 5YR5% (にじみ棕色)
9-19	高坏	— (4.8) —		内) 赤色塗彩、縦・横位のミガキ 外) 赤色塗彩、縦・横位のミガキ。黒褐色を呈する漆状の付着物が看取される。	完全実測、II区 胎土 白色系の粘土を使用し、白色粒子を多量に含む。 焼成 良好 色調 赤色塗彩面) 10R5% (赤色) 他) 10YR5% (淡黄棕色) 断面にカヤ状の炭化物が看取される。
9-22	瓦筒	— (4.2) —	2条の沈線が通る。	内) ロクロ横ナテ 外) ロクロ横ナテ	破片実測 IV区 胎土 黒色粒子を少量含む。 焼成 良好 色調 灰輪面) 5Y5% (灰オリーブ色) 断面) 2.5Y5% (黄灰色)
9-25	坏	(10.8) (3.2) —	体部下位に隆を形成する。	内) ロクロ横ナテ 外) ロクロ横ナテ	破片実測 IV区 胎土 白色細粒子を少量含む。 焼成 良好 色調 10YR5% (褐灰色)



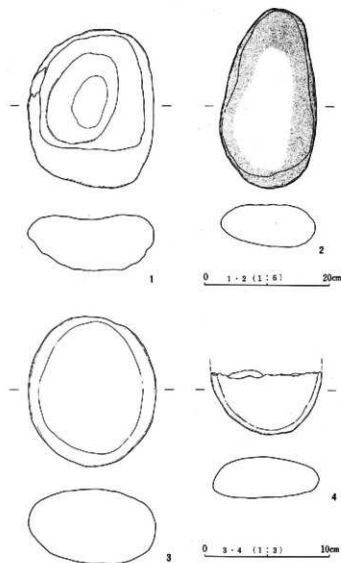
第9图 第2号溝状遺構内出土土器実測図



第10図 第2号溝状遺構実測図・遺物分布図

I～IV区から出土する土器は弥生時代～中世に至る断片的なものであり、出土量に時期的な偏向が認められない。一方、V・VI区及びユニットにおいては前者とは対象的で、古墳時代の坏(10—22)が1例認められる以外は弥生時代後期の土器のみが占め、ことにユニット内においては顕著であり、他時期の遺物は皆無であった。礫・石器遺物については、I・II区に分布が集中する。以上のことから、遺物の分布状態は本址の形態と密接に関係していることが窺える。

遺物 (第9・10図、図版四)



弥生時代後期の土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・石皿状石器・磨石がある。弥生土器の出土量が最も多量であり、他時期の土器は細片が数例観られるのみであり、また、弥生土器は角が丸味を帯びて磨耗したものが大半を占める。

弥生土器の器種には壺・甕・高坏・鉢が認められる。9—14は壺である。9—1は小型の壺であるが器厚約8mmと厚く、全体的に拙劣さを感じさせるつくりを呈する。9—3～8は頸部位の破片であり、櫛描籐状文(5)・所謂「T字文」(6～8)が施文されている。9—13は胴下半外縁部位の破片である。9—15～18は甕であり、櫛描羽状沈線文(15)、櫛描籐状文・波状文(16・17)が描かれている。9—19は高坏、20は鉢である。9—21は土師器坏で、外面はへら削りが認められ、胎土は緻密である。9—22・23は須恵器であり、長頸壺の頸部破

第11図 第2号溝状遺構内出土石器実測図

片と思われる。9—24~26は須恵器の坏であり、25は体部下位に稜を有し、26は回転糸切り痕が認められる。27はハケ塗りの灰釉陶器坏破片である。この他図示し得なかった土器のなかに青磁細片が1例観られる。また石器遺物としては、石皿状石器(11—1)・磨石(11—2~4)が出土している。11—2は火熱を受けた痕跡が看取され、多量の炭化物が付着している。石質は輝石安山岩(11—1・3)、安山岩(2)、角閃石・輝石安山岩(4)である。

以上これらの出土遺物は混在しており、伴出遺物とは捉えられないが、ユニット地区の弥生土器の分布状況・遺存状態より、本址は弥生時代後期の遺構(ユニット地区)を破壊して構築していることが推測でき、また近・現代の遺物が出土していないことから、漠然と弥生時代後期以降~近世の所産と考えられる。性格は不明である。

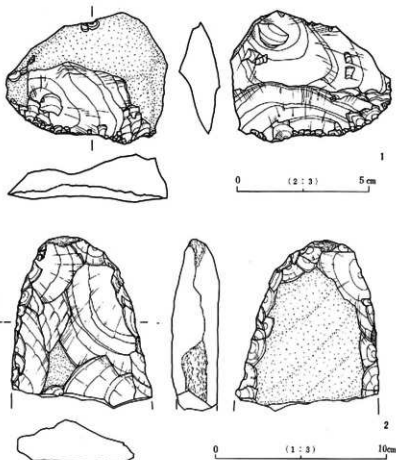
第3節 遺構外出土の遺物

土器

弥生時代後期の壺・甕、土師器坏・土師質土器の坏・鍋、中・近世の陶磁器細片が出土しているに過ぎない。

石器(第12図、図版四)

12—1は粗雑な調整剥離の施されたスクレイパーでB地区第II層より出土している。技術・形態面・出土状況からは時期を決定し得る根拠は看取されないが、比較的大きく良質な黒曜石素材が用



第12図 遺構外出土石器実測図

いられていることより、その採集が可能であった旧石器・縄文時代の所産と考えたい。12—2は刃部を欠損した打製石斧である。粗雑な剥離が施され、裏面には自然面を残す。石質は安山岩であり、B地区第I層より出土している。

第V章 調査のまとめ

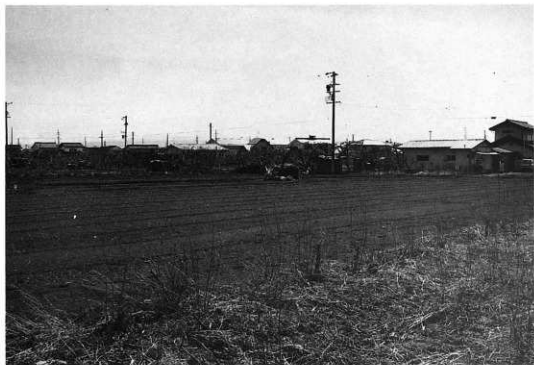
一本柳遺跡群東大門遺跡から出土した遺構・遺物は、溝状遺構2条・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・青磁・陶磁器であり、出土遺物・覆土層等の様相から第1号溝状遺構は弥生時代後期後半の所産と考えられる。

調査以前においては、本遺跡の周辺には東一本柳遺跡・北一本柳遺跡・西八日町遺跡・北西の久保遺跡・東一本柳古墳等の大規模な遺跡や古墳が存在するため、本調査地区からもそれ等の遺跡に匹敵する遺構・遺物が検出されるものと予想された。しかし、予想に反し遺構・遺物の出土は僅少であった。このことから、今回の調査地区は、湯川右岸の台地に展開される集落遺跡と若宮神社周辺に広がる低湿地帯との境界に位置し、遺構の密度が希薄になる地域であることが明らかになった。即ち、本調査において東大門遺跡の外縁が露出し、集落址の展開される範囲が限定されたことになり、遺跡の構造を把握する上で重要な情報が獲得できたものと思われる。また、遺跡の外縁部から第1号溝状遺構が検出されたことは非常に興味深い。検出位置・規模からすれば、弥生時代の環濠として捉えて大過ないが、断面形態に疑念が残る。通常環濠の断面形態は、敵の進入を防げるため「V」字状を呈しているが、本址は壁の立ち上がりが緩やかであり鍋底状を呈している。このため、今回は第1号溝状遺構の性格をあまり限定せず、便宜的に区画性を帯びた溝とし捉えておきたい。

なお、本遺跡の地籍名（東大門）や若宮社、あるいは中仙道に関連する遺構は、今回の調査では確認されなかった。今後は周辺地域の歴史的史料調査を推し進めるとともに発掘調査を行い、より巨視的な視野に立った東大門遺跡の究明を行ってゆきたい。

引用参考文献

- | | | |
|----------|------|------------------------|
| 佐久市教育委員会 | 1972 | 『佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告』 |
| 佐久市教育委員会 | 1972 | 『佐久市岩村田一本柳遺跡発掘調査概報』 |



1 東大門遺跡遠景（北東より臨む）



2 Aトレンチ完掘状況（西方より）



3 Bトレンチ表土削平作業（北方より）



4 Bトレンチ完掘状況（北方より）



1 第1号溝状遺跡（西方より）



2 第2号溝状遺構（南方より）



3 第1号溝状遺構セクション（北方より）



4 第2号溝状遺構セクション（南方より）



1 石器出土状況(東方より)



2 第1号溝状遺構出土土器



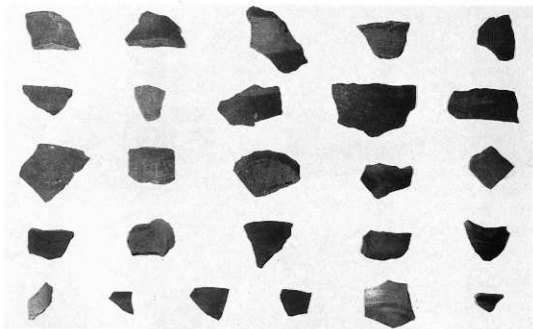
3 第1号溝状遺構出土土器



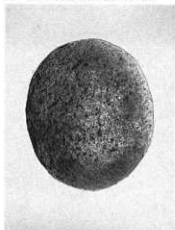
4 第2号溝状遺構出土土器



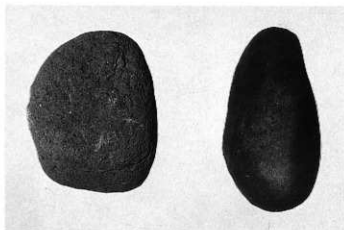
5 第2号溝状遺構出土土器



1 第2号溝状遺構出土土器



2 第2号溝状遺構出土土器



3 第2号溝状遺構出土土器



4 調査区外出土土器



5 調査スナップ

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集

長野県佐久市

一本柳遺跡群

東 大 門 遺 跡

1990年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集

岩村田遺跡群

SUGE TA

菅田 IV

長野県佐久市岩村田菅田遺跡第4次発掘調査報告書

1990

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

1 本書は、浅麓水道企業団による庁舎改築事業に伴う、岩村田遺跡群菅田遺跡の第4次発掘調査報告書である。

2 調査委託者 浅麓水道企業団

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査対象地番および面積 岩村田遺跡群菅田遺跡IV (略号 I I SIV)

佐久市大字岩村田字今宿542-1

200㎡

5 調査期間 発掘調査 平成元年4月19日

整理調査 平成元年4月20日～平成2年3月31日

6 調査団の構成

(事務局) 佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳

庶務係長 畠山 俊彦

庶務係 菊地 直美

飯沢 恵子 (平成元年6月就任)

調査係主査 高村 博文

調査係 三石 宗一、小山 岳夫、小林 真寿、翠川 泰弘、助川 朋広、
神部 妙子 (臨時職員)

(調査団)

団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)

調査担当者 翠川 泰弘

調査補助員 小林 幸子、木島 美子 (佐久考古学会員)

整理協力者 木内 明美、花岡美津子

遺物写真 畠山 俊彦

7 本書の編集・原稿執筆及び調査現場写真の撮影は翠川が行った。尚、遺跡の環境については昭和62年度刊行の第3次調査報告書で詳述されているため、本書では省略した。

8 本調査に関するすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、佐久市役所浅間支所にご協力及びご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

目 次

例言

第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機	1
第2節 調査日誌	1
第II章 基本層序及び概要	5
第1節 基本層序	5
第2節 検出遺構・遺物の概要	5
第III章 調査のまとめ	7
引用参考文献	

挿 図 目 次

第1図 菅田遺跡第4次発掘調査対象地	2
第2図 菅田遺跡発掘区設定図・遺構全体図	3
第3図 基本層序模式図	5
第4図 Bトレンチ出土石器実測図	6

写真図版目次

図版 一	1 菅田遺跡近景
	2 菅田遺跡近景

図版 二	1 Aトレンチ
	2 Bトレンチ
	3 Bトレンチセクション
	4 第1号溝状遺構掘下げ状況
	5 第1号溝状遺構完掘状況
	6 Bトレンチ埋め戻し状況
	7 石臼

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

菅田遺跡は、佐久市岩村田に所在し、佐久平特有の田切り地形上に細長く展開する岩村田遺跡群の南東部に位置しており、標高は約710mを測る。本遺跡は過去3回の調査が行われている。昭和59・60年度佐久市教育委員会によって実施された第1・2次調査においては、近接する大井城跡との関連を窺わせる沢状に凹んだ低地形が検出されるとともに、中世の所産と考えられる遺物の出土が見られた。さらに、調査区が全域にわたり、低地性に富んでいることも確認された。また、昭和61年度当センターで行った第3次調査においても低湿地帯が確認され、本遺跡がほぼ全域にわたって低湿地に立地する遺跡であることが判明している。

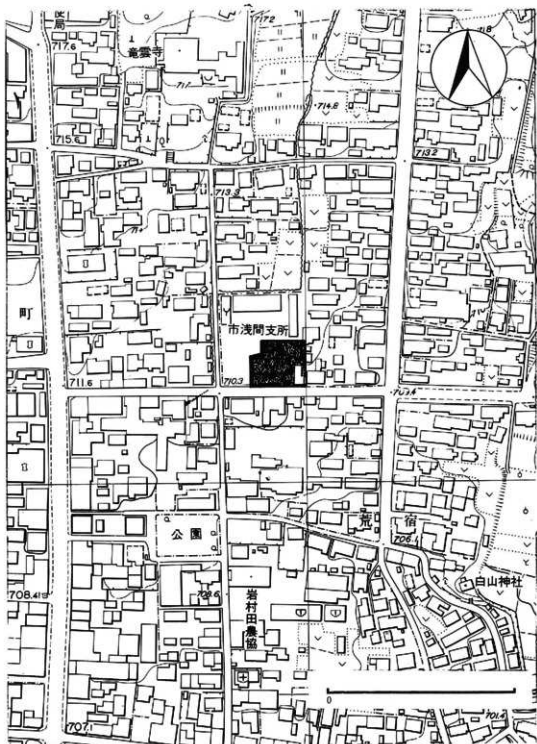
平成元年度、浅麓水道企業団による庁舎改築事業が本遺跡内で計画されたため、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、記録保存する必要性が生じた。そこで、佐久市教育委員会が浅麓水道企業団より委託をうけ、佐久市教育委員会より委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。

第 2 節 調査日誌

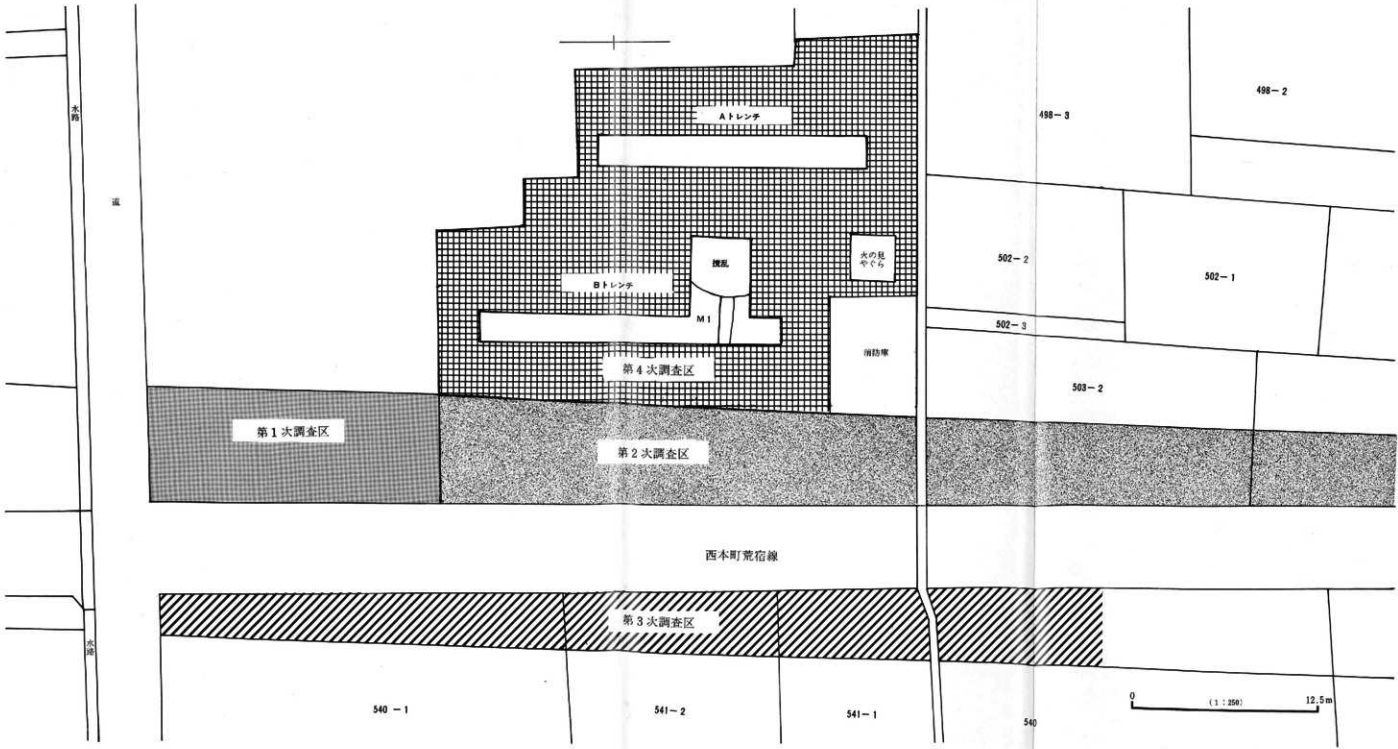
4月19日（水）

バックフォーによるトレンチ調査を行い、基本的な土層の堆積状態及び遺構の存否を確認する。調査区北側に設置したトレンチをAトレンチ、南側をBトレンチとし、表土・黒色土を順次剥ぎ取り、地山を露呈させる。Aトレンチは地表下約1.5mの深さまで近・現代の構築物によって攪乱されており、遺構は検出されなかった。Bトレンチでは中央やや東寄りの位置に溝状遺構が検出される。遺構の掘り下げ作業に着手するが、激しい湧水によるトレンチ壁の崩落現象が次々と生じ、トレンチ内における作業の続行を妨げた。そこで急遽掘り下げ作業を中止し、余儀なく全容の把握し得ないM1の実測作業・写真撮影に移行する。

全体写真の撮影後、バックフォーによる埋め戻しを行い、すべての現場作業を終了する。



第1図 菅田遺跡第4次調査区設定図 (1:2,500佐久市基本図9・15による)



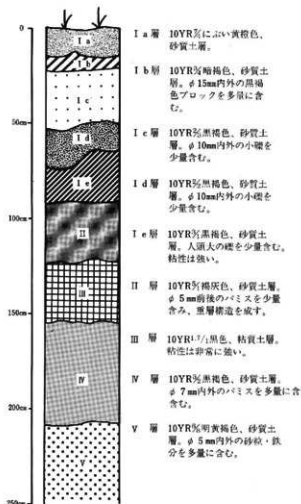
第II章 基本層序及び概要

第1節 基本層序

菅田遺跡の第4次調査地区は標高約710mを測り、現況地形は北側から南側へ緩く傾斜する。過去3回の調査により、菅田遺跡の旧状は北側の田切り地形から継続する谷地形の低湿地遺跡であることが確認されているが、本調査地区全域においても、低湿地に特有な土層が観察された。

遺跡の基本的な土層堆積状況を、Bトレンチ西端部北壁のセクション図を使用して第3図に提示した。第I_a～I_e層は近・現代の瓦・陶磁器を多量に含む人為的な攪拌土及び埋土である。第II層はきわめて細かく粘性に富み、微妙に性質の異なる土層が互層を成して水平に堆積する。第III層はきめ細かい有機質土であり、下方へ移向するにたがって灰色味を帯びる。第II・III層は共に低湿地や湖床等に観られる堆積層と類似する。第IV・V層は火山灰層である。第IV層は上位に堆積した第III層の影響により、黒色系の色調に変化したものと考えられる。

以上の様に菅田遺跡の基本層序は5層に分割できるが、第I_a層以外は堆積時あるいは堆積後に水の影響を受けていることが窺える。また、菅田遺跡第3次調査との層序対比関係は、第I_a～I_e層が第I～III層、第II層が第V～VII層、第III層が第VIII層、第IV・V層が第IX・X層となる。



第3図 基本層序模式図

第2節 検出遺構・遺物の概要

今回の調査区は脆弱な堆積土と激しい湧水により、実質調査範囲及び調査内容が限定されてしまい充分な調査を行うことはできなかったが、下記の遺構・遺物が検出された。

遺構

溝状遺構 (M1) 1条 時期不明

遺物

土器	弥生時代	壺細片
石器	中世	石臼

第1号溝状遺構 (第2図、図版二)

Bトレンチ東端に位置し、第IV層上において検出された。北部は近・現代の構築物によって破壊され、南・東部は生活の安全性を確保するための予備地域となり、未調査である。

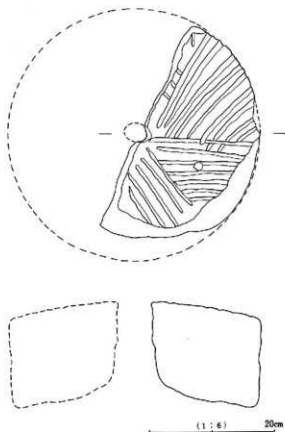
規模は検出長310cm、検出幅424cm (東壁は未確認)、深さ145cmを計測できるに過ぎないが、計測値によ

り大規模なものであることが想定できる。壁体は第IV・V層を利用しており、立ち上がりは急である。底面の状態は激しい湧水のため不明確であるが、北から南へレベルを低下させている。

近・現代の陶磁器・瓦の混入遺物は観られるが伴出遺物は無く、所産期は不明である。

遺物 (第4図1、図版二)

Bトレンチ第I層より検出された下臼破片である。推定径40cm、器高16.6cm、ふくみ2.9cm、芯穿孔推定径5.6cmを計測する。残存率は1/2程度であるため全容を把握し得ないが、図上復原により、6分画であることが推察される。石質はややきめの細かい安山岩である。



第4図 Bトレンチ出土石器実測図

第三章 調査のまとめ

今回、菅田遺跡より検出された遺構・遺物は僅少であり、その内訳は溝状遺構1条・弥生土器細片1点・石臼1点である。地表下1m内外は江戸時代以降の構築物による破壊をうけた痕跡が窺えるとともに、その下方は低湿地に特有な黒色を呈する有機質土が厚く堆積していることが確認され、またこの黒色土の層厚はAトレンチの東端においてももっとも厚く約1.3mを測り、この地点より東方へ地山が沢状に落ち込んでいることが明らかになった。

第1次から第4次調査の結果を総合すると、菅田遺跡はほぼ全域にわたり低湿地に立地する遺跡であり、近世以前の遺構・遺物の存在が希薄であることが理解できる。この傾向を推し量るならば、近世以後の人々は居住空間として、それ以前の人々は居住空間以外の生活空間として占めた可能性の高いことが指摘でき、その要因には、菅田遺跡周辺が「足軽屋敷の池」と伝承される様に、少なくとも近世以前においては低湿地が顔を出しており、居住空間としての適地ではなかったことが推察される。一方このことは同時に近世以前の人々にとっては菅田遺跡が居住空間以外の生活空間であったことをも肯定することであり、更にこの考えを推し量れば、本遺跡より弥生土器が1例検出された意義が極めて重要になる。眼前に広がる低湿地を見た弥生人は一体何を考えたろうか。この土地を稲作に利用しようとは考えなかっただろうか。1片の土器より古代に対する想像は果てしなく広がっていく。たった1片の土器であれ、土器は無限に物語る。

今回の調査は極く限られた範囲内での調査であったため推測の域を脱し得ないが、本遺跡は近世以前と以後の両時期において性格の異なる可能性が高く、今後の調査に2つの着眼点が必要であることを示唆してくれた。近接する大井城跡との関連性も含め、今後の調査に委ねられた課題は大きい。

引用参考文献

佐久市教育委員会 1986 『大井城跡(黒岩城跡)』

佐久埋蔵文化財調査センター 1987 『菅田III』



1 菅田遺跡近景（東方より）



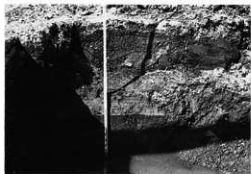
2 菅田遺跡近景（西方より）



1 Aトレンチ (西方より)



2 Bトレンチ深掘り状況 (南西より)



3 Bトレンチセクション (南より)



4 第1号溝状遺構掘り下げ状況 (南西より)



5 第1号溝状遺構完掘状況 (東より)



6 Bトレンチ埋め戻し状況 (南西より)



7 石白 (1:6)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集
長野県佐久市

岩村田遺跡群

菅田遺跡 IV

1990年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第22集

中金井遺跡群

NAKA

中

KANA

金

I

井

II

長野県佐久市小田井中金井遺跡第2次発掘調査報告書

1990

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

1 本書は、佐久市土木課による市道5-2号線改良工事に伴う、中金井遺跡群中金井遺跡の第2次発掘調査報告書である。

2 調査委託者 佐久市土木課

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査対象地番および面積 中金井遺跡群中金井遺跡II (略号ONKII)
佐久市大字小田井1164他

900㎡

5 調査期間

発掘調査 平成元年7月17日～7月19日

整理調査 平成元年7月20日～平成2年3月31日

6 調査団の構成

(事務局) 佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正巳

庶務係長 畠山俊彦

庶務係 菊池 直美

飯沢 恵子 (平成元年6月就任)

調査係主査 高村 博文

調査係 三石 宗一、小山 岳夫、小林 真寿、翠川 泰弘、助川 朋広、

神部 妙子 (臨時職員)

(調査団)

団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)

調査指導者 林 幸彦 (佐久市教育委員会)

須藤 隆司 (佐久市教育委員会)

羽毛田卓也 (佐久市教育委員会)

竹原 学 (佐久市教育委員会)

調査担当者 翠川 泰弘

調査補助員 小林 幸子、木島 美子 (佐久考古学会員)

調査協力者 青木あさ代、荒井かつ、荒井ふみ子、江口まさえ、金沢花子、木内
明美、小林とめの、小林まさ子、酒井豊子、佐藤玉枝、高橋かね子、

高橋恒代、高橋ふみ、高橋冬子、高橋良市、武井豊子、角田すい、
中山いつ代、中山たのし、中山弥太郎、中山雪子、花岡美津子、樋沢
しづい、星野保彦、矢野さく江

遺物写真 畠山 俊彦

- 7 本書の編集・原稿執筆はすべて翠川が行った。なお、遺跡の立地と環境・基本層序については昭和63年度刊行の中金井遺跡群荒田・上金井遺跡発掘調査報告書で詳述されているため、本書では省略した。
- 8 本書に関するすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、荒田区長高橋次男氏をはじめ地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

凡 例

- 1 遺構の略称 溝状遺構⇒M 土坑⇒D
- 2 遺構の番号 金井城跡第1・2次調査からの継続番号を用いている。
- 3 基本層序 本遺跡において確認された基本層序は荒田・上金井遺跡調査区西側と同様である。
- 4 水系レベルについては名遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。
- 5 挿 図
 - 1) 縮 尺 溝状遺構⇒1/120、但しM38は1/80、土坑⇒1/30
 - 2) 遺構全体図は協同測量社作成の航空測量図を使用した。
 - 3) 遺構実測図に用いたスクリーンは地山を表す。
 - 4) 方 位 土坑に用いた方位は磁北であり、他は真北である。

目 次

例 言

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 発掘調査に至る動機	1
第 2 節 調査日誌	1
第 II 章 遺構と遺物	5
第 1 節 検出遺構・遺物の概要	5
第 2 節 溝状遺構	6
1) 第24号溝状遺構	6
2) 第38号溝状遺構	6
3) 第56号溝状遺構	7
4) 第57号溝状遺構	8
5) 第58号溝状遺構	9
6) 第59号溝状遺構	9
第 3 節 土坑	9
1) 第1615号土坑	9
2) 第1616号土坑	9
第 III 章 調査のまとめ	11
引用参考文献	

挿 図 目 次

第 1 図 中金井遺跡発掘区設定図	2
第 2 図 中金井遺跡遺構全体図	3
第 3 図 金井城跡堀・溝址配置図	5
第 4 図 第38号溝状遺構セクション図	6
第 5 図 第56・57号溝状遺構実測図	7
第 6 図 第58・59号溝状遺構実測図	8
第 7 図 第1615・1616号土坑実測図	10

写真図版目次

図版 一 1 中金井遺跡全景

図版 三 1 第56・57号溝状遺構完掘状況

2 第56号溝状遺構セクション

3 第57号溝状遺構セクション

4 第58号溝状遺構完掘状況

5 第59号溝状遺構完掘状況

図版 二 1 第24号溝状遺構セクション

図版 四 1 第1615号土坑遺物出土状況

2 第38号溝状遺構セクション

2 第1615号土坑完掘状況

3 第1616号土坑遺物出土状況

4 第1616号土坑完掘状況

5 第1616号土坑出土獣骨

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

中金井遺跡群中金井遺跡は佐久市の北端、中金井遺跡群の南東に位置し、湯川右岸に形成された標高750～780mを測る田切り地形の台地上に立地する。

中金井遺跡群内の調査は、試掘調査も含め過去5回実施されている。昭和62年には荒田・上金井遺跡の発掘調査及び金井城跡の試掘調査が行われ、金井城跡に関連する多数の遺構の存在が確認された。翌昭和63年には、荒田・上金井遺跡、金井城跡の本調査が実施された。金井城跡は長野県土地開発公社による工場団地造成事業に伴う調査面積約80,000㎡に上る大規模な発掘調査となり、従来の中世城郭に対する認識を一掃しなければならない様な成果が得られた。この調査により、金井城跡は「梯郭式」と呼ばれる構えを有し、大小様々な規模の空堀が9重に巡らされていることが判明した。また出土した遺構の数は膨大であり、その内訳は竪穴建物址603棟・掘立柱建物址50棟・土坑720基・堀及び溝状遺構29条・土塁関連遺構6基・柱穴址無数である。

昭和63年度に引き続き、佐久市土木課による緊急地方道路整備事業（市道5-2号線道路改良）が本遺跡内において計画されたため、遺構の破壊が余儀なくされる事態となった。そこで佐久市教育委員会が市土木課より委託をうけ、佐久市教育委員会より委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。

第 2 節 調査日誌

7月17日（月）

バックフォールにより表土削平作業・大空堀（M24・M34）の掘り下げ作業を開始する。

7月18日（火）

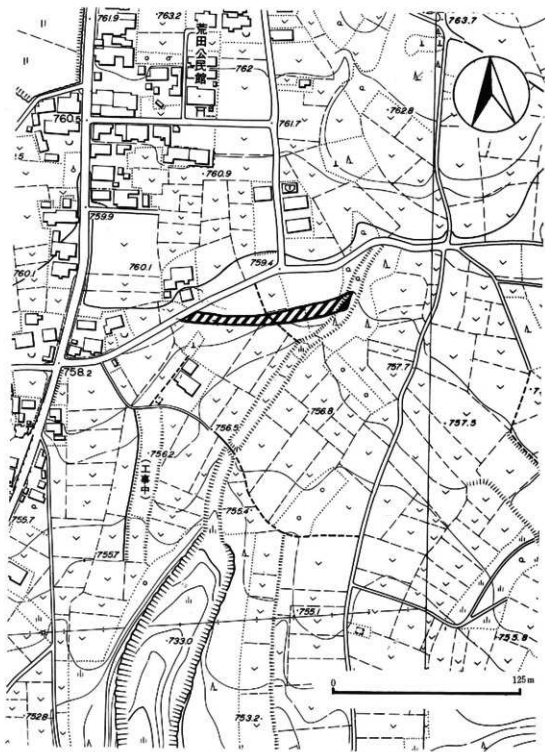
検出作業を行う。溝状遺構4条・土坑2基が検出され、掘り下げ作業に着手する。

7月19日（水）

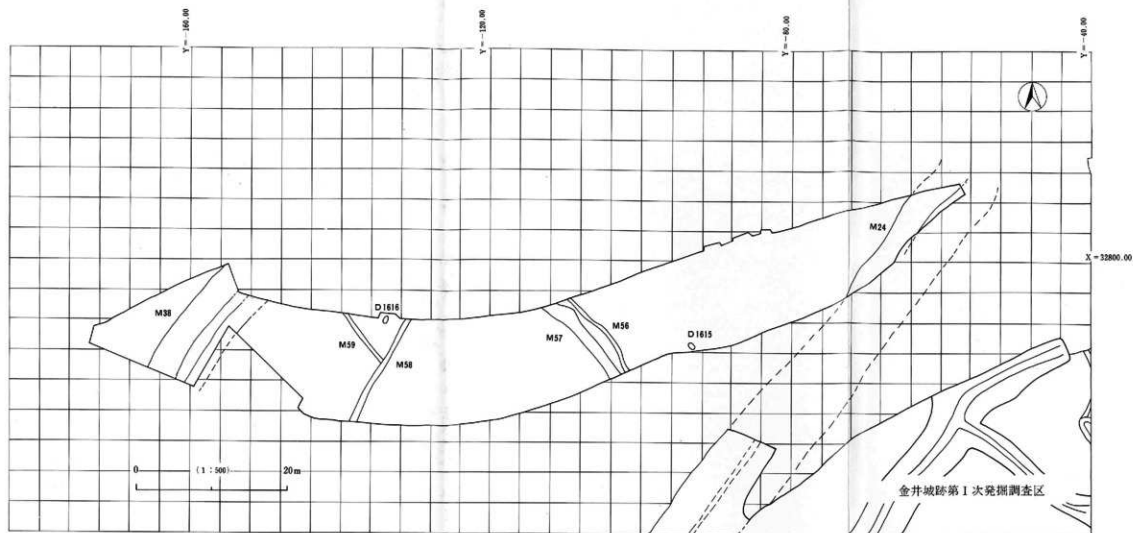
実測作業・写真撮影を順次行う。その後機材を撤収し、すべての現場作業を終了する。

7月20日（木）～平成2年3月31日（土）

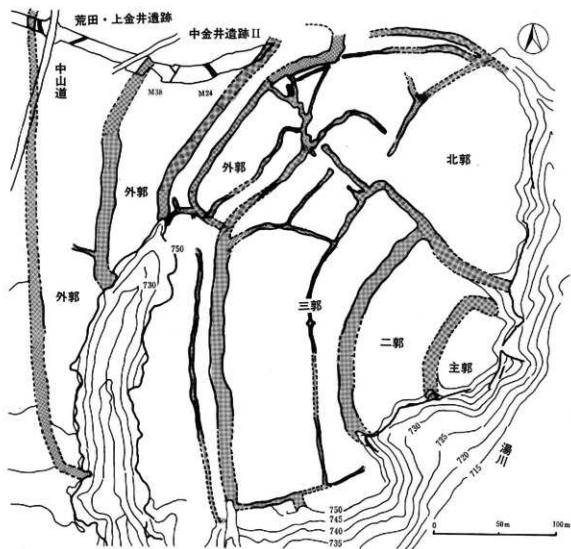
室内において、報告書作成作業を行い、すべての調査を終了する。



第1図 中金井遺跡発掘区設定図 (1:2,500佐久市基本図4・5による)



第2图 中金井遗址口道横全图



第3図 金井城跡掘・溝址配置図 (1 : 3,000)

第II章 遺構と遺物

第1節 検出遺構・遺物の概要

遺構

溝状遺構 (M24・38・56～59) …… 6条 土 坑 (D1615・1616) …………… 2基

遺物

土器……………土師質土器細片、石器……………軽石製紡錘車未成品、加工痕を有する軽石

自然遺物……………獣骨

第2節 溝状遺構

1) 第24号溝状遺構

遺構 (図版二)

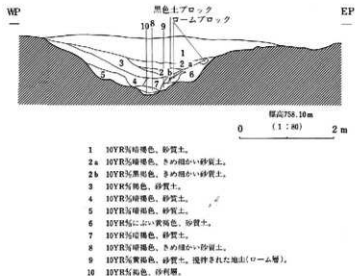
本址は調査区東端に検出された大空堀であり、全容の極く一部が検出されたに過ぎない。本址は金井城跡の外郭を構成する大空堀であり、主郭を中心に扇状に走る。地面上においても凹みが確認出来、南北においては西北の防壁となっていた田切り地形に続いている。溝幅約9mを測り、底面の幅は非常に狭く、略三角形の断面形を呈する急峻な壁が形成されており、その登降には辛勞が伴う。遺構の掘り下げを重機で行ったため、検出された遺物はない。

2) 第38号溝状遺構

遺構 (第4図、図版二)

調査区西端において検出された。検出位置・航空写真より看取される現況地形の変化から、金井城跡より継続する第38号溝状遺構であることが理解できる。

金井城跡の外郭に巡らされた大空堀であり、主郭を中心に扇状に展開するものと思われる。溝幅約7.2m、検出面からの深さは約70cmを測り、略逆梯形状の断面



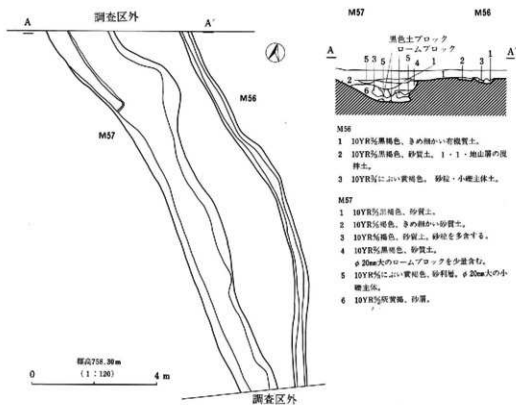
第4図 第38号溝状遺構セクション図

形を有する。底面は平坦面を形成し、北から南へ穏やかにレベルを低下させている。壁の傾斜は第24号溝状遺構に比べ緩く、西壁には約70cmを測る平坦面（犬走り）が形成されている。覆土層は10層からなり、各層共に砂質性を帯びているが、底面付近は砂利の含有率が高く、水が流れた痕跡が窺える。

3) 第56号溝状遺構

遺構（第5図、図版三）

調査区は中央より検出された。北西から南西方向へ弧を描きながら走る小規模な溝であり、他遺構との重複関係はない。検出長約11.9mを測り、溝幅は30cm内外を保ちながら南方へ傾斜する。覆土層は3分に分割された。砂粒を多含し、水の流れた痕跡が窺える。なお、第57号溝状遺構と併走していることから何らかの関連性があったことが推察される。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

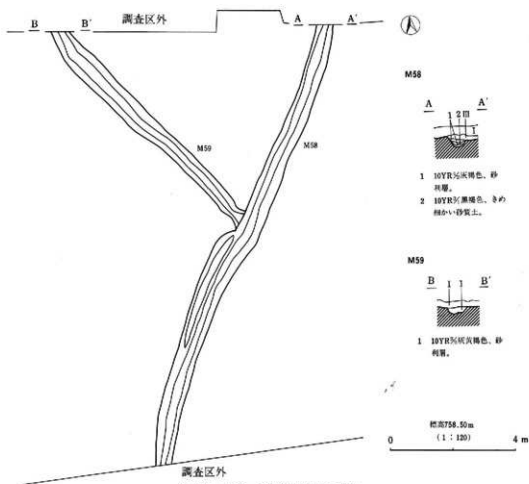


第5図 第56・57号溝状遺構実測図

4) 第57号溝状遺構

遺構 (第5図、図版三)

前述した第56号溝状遺構と併走し、他遺構との重複関係は無い。北端部において形態・規模を変化させているが、概ね溝幅120cm内外を保ちながらやや弧を描いて、北西から南東へ走る溝であり検出長は約12.6mを測る。断面形は逆梯形状を呈する。覆土層は6層に分けられるが、第6層は砂粒とローム・黒色土ブロックを多含し、攪拌されていることから、水が流れたことを窺わせる。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。



第6図 第58・59号溝状遺構実測図

5) 第58号溝状遺構

遺構 (第6図、図版三)

調査区の西部において検出された。第59号溝状遺構と重複関係にあり、本址が第59号溝状遺構を破壊し、新しい。溝幅70cm内外を保ちながら、北東方向より南西方向にほぼ直線的に走る小規模な溝状遺構である。検出長は約15mを測り、略逆梯形状の断面形を呈し、中央部においては幅10cm内外のテラス面が形成され、2段構成となる。覆土は2層からなり、砂利を含有し、水の流れた痕跡が窺える。

出土遺物は皆無であり、時期及び性格は共に不明である。

6) 第59号溝状遺構

遺構 (第6図、図版三)

調査区東部に位置する。第58号溝状遺構と重複し、第58号溝状遺構に本址が切られる。北西から南東方向に直線的に走り、第58号溝状遺構との重複部において収束する。溝幅は60cm内外、検出長は約8.3mを測る。壁の立ち上がりは緩く、略逆梯形の断面形を呈す。覆土層は砂利層1層のみであり、水の流れた痕跡が窺える。

出土遺物は皆無であり、時期及び性格は共に不明である。

第3節 土坑

1) 第1615号土坑

遺構 (第7図、図版四)

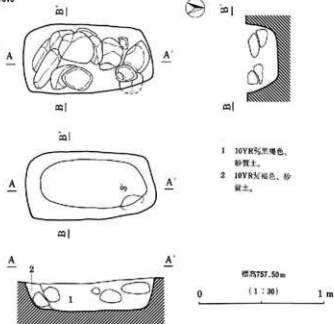
調査区中央やや東寄りの調査区南壁下に検出された。長軸長102cm×短軸長54cmを測る長方形プランを呈し、長軸はN-4'-Eを示す。底面は平坦面を形成し、壁の立ち上がりはやや急である。断面形は逆梯形状を呈し、検出面からの深さは約25cmを測る。覆土内には径25cm内外の河床礫が多量に認められ、遺構を充填するような状態で検出された。覆土層は、黒褐色・褐色を呈する2層の砂質土層からなる。

所産を決定付ける出土遺物は無く、性格も不明である。

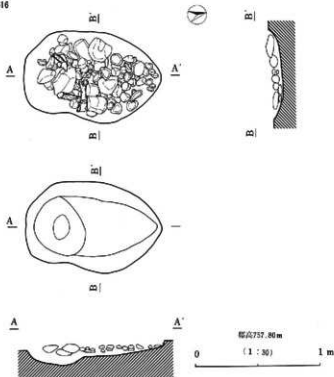
2) 第1616号土坑

遺構 (第7図、図版四)

D1615



D1616



第7図 第1615・1616号土坑実測図

調査区西方の北壁下に検出された。長軸長110cm×短軸長72cmを測る東壁の凹んだ略卵形の平面形を有し、長軸方位はN-13.5°-Eを指す。鍋底状の断面形を呈し、南部は1段深くなり2段掘りの構成となる。遺構内には径5~20cm大の多量の礫が充填されており、礫に混じって獣骨片も看取された。覆土は、黒褐色(10Y R3/3)を呈する砂質土層一層からなる。出土遺物には軽石製の紡錘車未成品(2点)・加工痕(金属器による)を有する軽石(2点)及び獣骨片(3点)が観られる。なお、充填されていた礫の大半は、軽石及び火山弾である。

出土遺物は何れも本址の時期を決定するための資料としては不十分であるが、少なくとも本址の上限年代が、充填された礫の中に混在した軽石製紡錘車未成品の製作年代を遡り得ないことだけは明らかである。また、本

址の性格については不明である。

註1 この獣骨については、平成2年度刊行が予定されている金井城跡の本報告書において、鑑定結果を掲載する予定である。

第三章 調査のまとめ

今回、中金井遺跡より出土した遺構・遺物は、溝状遺構6条（内大空堀2条）・築石土坑2基
軽石製紡織車未成品2点・加工痕を有する軽石2点・獣骨3点である。

金井城跡の外縁は、昭和63年度に行われた荒田・上金井遺跡の調査結果より明らかな様に、荒田・上金井地区まで及んでおり、それより、より主郭に接近した位置に相当する当遺跡が金井城跡の郭内に属することはここで言及するまでもない。従って、本調査地区からも金井城跡に関連する遺構が検出され、金井城跡の外郭を構成する一部である本遺跡の様相は、金井城跡の外郭調査結果に等しく、遺構・遺物の存在は希薄であった。

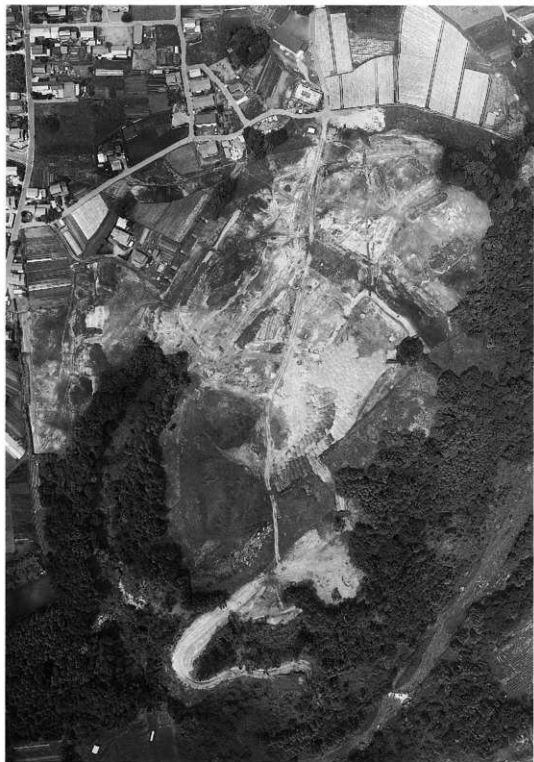
今回の調査は、調査範囲が道路幅に限定されたため遺構の全容が把握できず、遺構の時期及び性格については不明な点が多いので、整理の意味で所見を記すのみに留めておく。

- 第24・38号溝状遺構は、金井城跡より連続する大空堀である。
- 第56・59号溝状遺構は、砂粒を多含する土層に被覆されていることから、自然流路の可能性が高い。
- 第1616号土坑は、築石内に石製紡織車の未成品が使用されていたことより、遺構の上限年代が少なくとも石製紡織車の製作年代を廻り得ない。

以上の3点を指摘し得るが、より明確な位置付けについては、金井城跡の全体像とともに捉えてゆく必要があり、金井城跡の調査報告書に委ねること大である。

引用参考文献

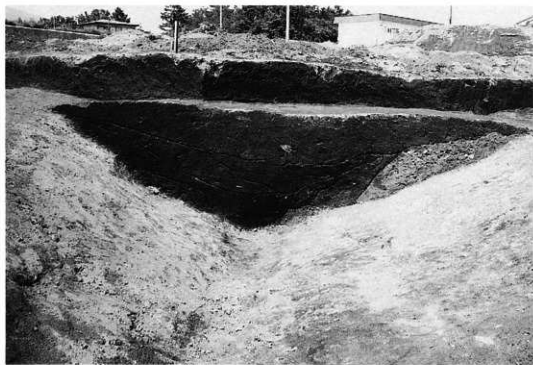
- 佐久埴蔵文化財調査センター 1989『荒田・上金井』
- 佐久埴蔵文化財調査センター 1989『金井城跡概報』



中金井遺跡全景 (協同測量社撮影)



1 第24号溝状遺構セクション（南西より）



2 第38号溝状遺構セクション（南西より）



1 第56・57号溝状遺構完掘状況（北西より）



2 第56号溝状遺構セクション（北より）



3 第57号溝状遺構セクション（南より）



4 第58号溝状遺構完掘状況（北より）



5 第59号溝状遺構完掘状況（北より）



1 第1615号土坑遺物出土状況（東より）



2 第1615号土坑完掘状況（東より）



3 第1616号土坑遺物出土状況（西より）



4 第1616号土坑完掘状況（東より）



5 第1616号土坑出土鹿骨

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集

長野県佐久市

中金井遺跡群

中金井遺跡II

1990年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	〔西裏・竹田塚〕(TNU NTM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	〔池畑・西野堂〕(YIT YMM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	〔芝間〕(ISM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	〔新町II〕(IIM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	〔沼上屋敷 下川原・光明寺〕(YKY YSK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	〔淡瀬・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I〕 (KAB KYM KNU KMOIII KMOI)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	〔高野町・西大久保〕(ATM SNO)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	〔北西の久保〕(IKK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	〔梨の木〕(NNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	〔菅田III・新町III・宮の上・中曾根・藤塚〕 (IIS IIMIII YMM INN TFK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	〔長峯古墳群〕(UNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第12集	〔西谷ふた〕(KNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第13集	〔新沢・寫石〕(NAZ IET)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第14集	〔龍の峯古墳群〕(TNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第15集	〔腰巻・西大久保II 曲尾II〕(SKM SNOII KMOII)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第16集	〔荒田・上金井 東赤塚II〕(NAK IHZ II)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第17集	〔新沢II・猪穂坂VI・梨の木II・宮の上II〕 (NAZII IBZVI NNNII YMMII)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第18集	〔藤下〕(INM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第19集	〔金井城跡概観〕(ONK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第20集	〔南上中原・南下中原 上型塚概観〕(NSM NNK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第21集	〔鶴ヲネ〕(KUZ)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集

長野県佐久市

一本柳遺跡群 東大門遺跡
 岩村田遺跡群 菅田遺跡IV
 中金井遺跡群 中金井遺跡II

1990年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 信毎書籍印刷株式会社